

氏 名	城山 萌々			
学 位 の 種 類	博士（芸術学）			
学 位 記 番 号	博甲第 7826 号			
学位授与年月	平成 28 年 3 月 25 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科			
学位論文題目	瑛九のリトグラフと版による表現 ー再現制作に基づく考察ー			
主 査	筑波大学教授	博士（芸術学）	五十殿 利治	
副 査	筑波大学教授	博士（芸術学）	太田 圭	
副 査	筑波大学准教授	博士（芸術学）	田島 直樹	
副 査	和歌山県立近代美術館学芸課長		井上 芳子	

論文の内容の要旨

（目的）

瑛九（本名・杉田秀夫、1911-1960）は戦前からフォトグラムのような先端的な技法を駆使した作家として頭角を現し、自由美術家協会の結成に参画し、戦後もデモクラート美術協会の中心となって活動する一方で、久保貞次郎を中心とする創造美術協会に協力するなど、多面的な活動によって注目されたが、点描による油彩の大作で新境地を開拓したところで早世した。活躍した時代から判断して、近代作家というよりも現代作家という方が相応しい面があることもあり、研究対象としてはまだ広く認知されていないのが現状である。

著者は瑛九作品のなかでもリトグラフについて注目度が低いことに着目して、版画制作者としての視点も加味しつつ、そのリトグラフ作品の創作プロセスや版のレイヤー構造等について調査研究を行い、第一に、全容を把握するために、既成の『瑛九石版画総目録』（1974 年）を参考にしつつ、瑛九のリトグラフ作品の総覧を作成すること、そして第二に、リトグラフ作品における「版による表現」の特質を明らかにすることを目指すとする。

（対象と方法）

本論は本編と別冊資料から成る。本編は序章、三章、結章、図版、表、資料（コレクション調査資料）、そして別冊資料は「コレクション調査に基づく瑛九リトグラフ作品総覧」によって構成される。

本論においては、瑛九のリトグラフ制作を考察対象として定め、宮崎県美術館を始めとしてリトグラ

フ作品の主要な所蔵美術館や所蔵家を訪ねて実見に基づいて作品を確認すること、その一方で、再現制作を行って、瑛九のリトグラフ制作の方法についても考察することによって、他の瑛九作品とも比較し、理解を深めるとともに、その知見をリトグラフ作品総覧に反映するという方法によって所期の課題を達成するとする。

(結果と考察)

著者はまず序章において研究背景について述べた上で、研究目的を設定し、先行研究を整理して、問題の所在を明らかにする。第1章では作品調査について述べる。瑛九の研究書を中心してリトグラフに関する記述を整理した上で、宮崎県立美術館、本間美術館、和歌山県立近代美術館、木水育男コレクション、宇佐見コレクション、そして筑波大学石井コレクションを対象として、作品のタイトル、サイズ、制作年、描画材、刷り色の数、主版の有無などについて、リトグラフ作品の実見調査を行った成果について整理している。主要コレクションにおける実見調査は必ずしも所蔵作品全作というところではなかったが、『瑛九石版画総目録』と比較してみると、それぞれ色が異なる異作、タイトルが異なる作、天地が異なる作の存在が判明することとなった。

第3章においては、調査結果に基づいて考察を行う。色数の分析から、1951年の初期の段階では単色刷りであり、実験作であること、そして本格化した1956年では墨一色の単色刷りに色を加える手法がとられたこと、さらに1957年には多色刷りが大多数に、これに集中して取り組んだこと、そして1958年には多色刷り3点に限られていることが明らかになった。一方、描画材についてみると、習熟を必要とするクレヨンによる作品が解き墨よりは多いものの、両者を併用している場合がほとんどであることが判明した。ただし、この場合、どちらが主となっているかは精査が必要であり、今後の課題であるとしている。つぎに、再現制作は三点に取り組み、瑛九の創造プロセスを探った結果、《街》ではレイヤーの構造においてフォトデッサンから発想した可能性が浮上し、また《ともしび》では瑛九がクロモトリトグラフィという旧式な手法に近いもので、原色と階調の活用に取り組んだこと、そしてエッチング的な線描も特徴的であること、さらに《花束》では即興的な点描による色版の層の表現が明らかになった。

終章においては、これまでの考察をまとめて、研究目的の第一として掲げた瑛九リトグラフ作品の全容の把握については、成果を総括して別冊資料として付した「瑛九リトグラフ作品総覧」を作成したこと、そして第二として版による表現については、瑛九がリトグラフの技法的特徴を作品構想の段階から算入して作品を制作したことが明らかになったと結論する。今後の課題としては、未見の『瑛九石版画総目録』カラー版の発見、より詳細な作品の精査などを挙げ、本論を締め括る。

審査の結果の要旨

(批評)

瑛九は先端的な表現に挑戦した作家として次第に認められてきているが、いまだ広く一般に知られているとはいえない。しかも著者が取り組んだ研究対象であるリトグラフ作品が、1950年代、とくにその後半に作品が集中するため、先行研究が乏しいものであることも手伝い、基礎資料の収集と分析という学術的な基本的作業に着手することとなった。しかし、著者はこの課題に正面から取り組み、リトグラフ作品に関わる主要なコレクションを訪ね、宮崎、福井、酒田、和歌山など遠方に足を運び、多数の作品を実見し、出来る限りの精査を行った。その成果は十分にリトグラフ作品総覧に反映しており、版

審査様式 2 - 1

画では多々あることとはいえ、相当数の異作の存在を明らかにすることになった。また、著者自らが制作者であることを活かして、再現制作によって、瑛九の創造のプロセスを確認したことも、この作家の戦後版画における位置づけについて重要な示唆を与えることになった。

このように著者は所期の目的をほぼ達成しており、学術的、そして資料的な価値の高い論文として評価することができる。

今後は、引き続き、瑛九によるリトグラフ作品について個々の作品を精査することで版の構造、異作の有無等について検証を進め、所期のリトグラフ総覧を完成させるべく努めることが求められるとともに、リトグラフ作品に限定されない瑛九像、すなわち戦前戦後を通じて活躍した瑛九という作家の全体像にも迫ることが課題となろう。

平成 28 年 1 月 21 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。